

教育研究業績書

2024年05月15日

所属：健康・スポーツ科学科

資格：非常勤講師

氏名：田中 新治郎

研究分野	研究内容のキーワード	
体育科教育学	保健体育科 体育科教育学 カリキュラム 運動文化 学習集団 グループ学習 授業研究 教材研究 教育方法	
学位	最終学歴	
教育学修士, 教育学士	広島大学大学院 教育学研究科 教科教育学専攻 博士課程前期 修了	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 修士論文の指導	2018年10月01日2020年3月31日	森田 彩の修士論文（中学校の体育授業における棒高跳びの指導に関する研究）の作成に向けて指導中
2. 修士論文の指導	2015年04月01日2017年03月31日	岩本玲希の修士論文「小学校『ボール運動』領域における構成主義的なカリキュラム開発の試みーICT活用による学びの過程の変化に着目してー」
3. 修士論文の指導	2012年04月01日2014年03月31日	井本 史の修士論文「引退及び引退を控えたスポーツ選手のセカンドキャリアに関する研究」
2 作成した教科書、教材		
1. スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり	2018年03月23日	学習指導案作成の基本とプラン集
2. 宮城の体育実践	2012年04月20日	宮城県において協同で実践研究を進めてきた成果を教育実践記録としてまとめた。矢部智江子教諭の実践への解説、山口正富教諭の実践への解説。制野俊弘教諭の実践への解説
3. スポーツの百科事典	2007年01月	「スポーツと集団づくり」「バーンアウト（燃え尽き症候群）」の項を執筆
4. 子どもと共に生きる体育の授業	1997年12月	体育実践記録集。教育実践の課題を科学と生活の統一と捉え、教科と教科外にまたがり子どもと教師の育ち合いの過程を提起している。
5. からだ育てと運動文化	1997年5月20日	実践記録集。体育科の役割を「からだ育て」と「運動文化の継承発展するための基礎的な技能と認識」と捉え、典型的な実践の事例を挙げ解説している。
6. ボール遊び・ボール運動の指導と学習カード	1996年7月10日	小学校第1学年から第6学年までの「ボール遊び」「ボール運動」領域の指導内容を例示し、指導方法として「学習カード」といった授業用の学習資料を例示した授業指導書
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 短距離走教材・当てっこペース走の実技講習	2019年12月7日	走りズムの安定化とスピードコントロール支配を短距離走の基礎技術とすると、これを以下に習得・理解させていくについては、教材研究の課題となる。これを目標タイムを速い・おそい・中間などと毎回タイム設定を変えさせ、その目標タイムと実際に走った際の所用タイムに誤差を限りなくなくすように教材化した当てっこペース走を取り上げ、その指導のねらいと手順を現職教員に講習した。
2. シンポジウム講演：第6回武庫川女子大学健康運動科学研究所シンポジウム	2016年11月12日	シンポジウム「コーディネーション・トレーニングは体育・スポーツに何をもたらすか」を主宰した。
3. シンポジウム講演：第2回武庫川女子大学健康運動科学研究所シンポジウム	2012年9月19日	『ライフステージと運動』というテーマに沿って「学齢期の運動と体育」と題して講演を行った。学齢期の体育指導においては性急に競技スポーツに当てはめてはならず、これを指導する際には競争形態に変更修正を加えて近似的に接近することを主張した。
4. 講演講師：第46回徳島県高等学校教育研究会保健体育学会「体力向上に向けた体育学習の取り組み」	2011年8月23日	体力向上に向けた体育学習についてスポーツ種目の技術特質を明確にし、系統的でスポーツ科学の成果を生かした技術指導の必要を述べた。
5. パネルディスカッションパネリスト：武庫川女子大学記念シンポジウム	2010年12月5日	「健康・スポーツ科学のリーダー養成」のテーマに沿って保健体育科教員の養成について持論を述べた。単一の専門領域に固定されることのない複数の領域を渡り歩く水平的な専門性、対象の変化に柔軟に対応できる適応的熟達がかこれからの体育科教育のリーダーに求め

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		られる資質であると述べた。
4 その他		
1. 野球部監督	2017年9月1日～現在	第33回全国女子大学野球選手権大会 優勝
2. 全日本女子大学野球連盟副理事長	2016年08月25日～現在	
3. 野球部顧問	2012年04月01日～現在	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭1級普通免許状（保健体育）	1982年03月25日	昭56高1普第55号 広島県教育委員会
2. 中学校教諭1級普通免許状（保健体育）	1981年03月25日	昭55中1普第1105号 広島県教育委員会
2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 西宮市立小松小学校における調査研究	2019年10月11日～現在	体育授業を観察し、学習者間のコミュニケーションを記録しながら学習内容、学習方法、学習集団の観点からコミュニケーションの実態を分析していく。
2. 立命館大学 非常勤講師	2013年04月01日2015年03月31日	「子どもとスポーツ」「プロジェクトスタディ」
3. 教員養成高度化システムの構築・発信	2012年09月2017年03月31日	兵庫教育大学・兵庫県立大学・神戸学院大学・神戸女子大学・神戸親和女子大学・武庫川女子大学・兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会による大学間連携共同教育推進事業（文部科学省大学改革推進等補助金）のワーキング・グループメンバー
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり	共	2018年03月20日	創文企画	第1部第1章「学習指導案とはなにか」 第2部1「学習指導案と修正」
2. 宮城の体育実践	共	2012年4月20日	創文企画	第3章5節「矢部智江子さんの実践について」149-150頁、第4章1節「山口正富さんの実践について」169-170頁、第4章2節「制野俊弘さんの実践について」179-180頁、久保健 田中新治郎（他20名）
3. スポーツの百科事典	共	2007年1月	丸善	「スポーツと集団づくり」と「バーンアウト（燃え尽き症候群）」を担当。「スポーツと集団づくり」では、スポーツという文化は社会的存在であり、集団的労作であると定義した。この集団性は時代とともにその在り方や課題が変わっていることを解説し、スポーツ集団づくりの今日的課題を提示した。「バーンアウト」では、病状の進行には「成功経験-没頭-停滞-固執-バーンアウト」といった規則があり、現代のスポーツのありようと深く関係すること、それゆえ、スポーツとの関わりに対処法の糸口があるとした。
4. 子どものからだと心 健康教育大事典	共	2001年7月	旬報社	健康教育の具体的な進め方を実践事例（「体育館で雪合戦」および「的あてゲーム」を担当）を提示する第一部と、健康教育のキーワードを解説する第二部からなる総合的な健康教育事典。「学習（ラーニング）」「学習集団」「教授と学習」「グループ学習」「系統学習・系統性」「コミュニケーション」「習熟」「目標（方向目標・到達目標）」「問題解決学習」「練習（エクササイズ）」の項目を担当した。それぞれ、一般的な解説にとどまらず、健康教育という視点から見た実践課題を提起する形で展開した。
5. 子どもと共に生きる 体育の授業	共	1997年12月	明治図書	第8章：「教科指導と生活指導の環流」を担当。教科領域と教科外活動領域の関連、教科指導機能と生活指導機能の関連を解説した後、すぐれた体育授業実践の記録をもとに、それらには共通性があることを指摘した。すなわち、領域毎の指導重点の違いを自覚しながらも、教育としては両機能を有効に活用（環流）させている点であり、このことの教育的意義を論じた。
2 学位論文				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
1. 集団づくりにおける自治と交わりのもたせ方	単	2019年10月1日	『たのしい体育・スポーツ』38巻第4号 創文企画	自治的な集団をめざしていく際には、集団的な活動（たとえばリーダーの役割など）の指導とあわせて個人と個人との交わり（交友関係）の指導の二つを統一的に進めていく必要がある。その際に、学ぶこと（内容）が明確な時、自治的な集団となるといえる。
2. 体育教材の歴史—4人の近代体育家—	単	2018年10月	『たのしい体育・スポーツ』37巻第4号42-45頁	古代ギリシア・中世・近代における身体教育・体育の教材の歴史を振り返り、教材がその時代の思潮を反映させて体育指導者（特にペスタロッチ・グーツムーツ・ヤーン・シュビース）によってつくり変えられていくことを確認した。教師が教材の歴史を学ぶことに意義は、教材を通じて教育目標、教育実践を見直していく可能性を教師は持っていることを自覚することである。
3. すべての子どもたちに豊かな運動文化と生きる力を—主権者を育てる体育・健康教育実践をしましょう—	共	2017年7月	『たのしい体育・スポーツ』号外8-16頁	教育の動向を、子ども・教師の視点から取り上げ、知識基盤社会、多文化共生社会、成熟した市民社会の到来にふさわしい教育研究の課題を指摘した。第1章を執筆した。著者：田中新治郎、丸山真司、石田智巳
4. 体育の学習指導要領を読む四つの視点	単	2017年6月	『体育科教育』65巻第7号16-19頁	次期学習指導要領の改訂を読み解くにあたって、以下の4点が改訂をきっかけに体育科の在り方を検討する上で課題になることを指摘した。すなわち、①体育科の本質に立ち返ること、②公教育の改編の中に位置づけて読み解くこと、③カリキュラム設計論を構築すること、④深い学びにどう応えていくかを課題とすることである。
5. 学校体育をめぐる動向分析と研究課題	単	2016年5月	学校体育研究同志会研究年報『運動文化研究』33号1-5頁	スポーツ庁の発足によって学校体育はどのような影響を受けるか、次期学習指導要領の改訂の動向を考察し、新たな時代に向けての課題を論じた。
6. 岐路に立つ学校体育	単	2015年12月	『体育科教育』第63巻第13号28-31頁	2015年スポーツ庁が文科省の外局として発足したことが、これまでの学校体育にどのような変化をもたらすかについて4つの視点を挙げた。すなわち、①新たなスポーツ庁だからこそ学校体育に期待することとは何か、②教科としての体育の位置づけが縮小され軽んじられる心配はないか、③体育・スポーツは学校や社会のなかで多面的に営まれ、扱われてきたが、スポーツ庁の発足で一面的になる恐れはないか、④スポーツと体育が対等な立場で相互補完的に存続していくことは可能であるか。
7. 決め手は深い思考を呼ぶカリキュラム		2015年5月	『体育科教育』第63巻第7号22-23頁	アクティブ・ラーニングは外的な活動的能動性ととも、内的で思考的能動性の両面が求められる。身体運動をともなう体育の学習においては、むしろ内的で思考的能動性をいかに保障していくかが決め手となる。体育という教科の背後には運動文化を有しており、これを学びの対象としていく体育のカリキュラムの有無が問われてくると論じた。
8. 『運動文化研究』誌の成果と課題	単	2015年4月	学校体育研究同志会研究年報『運動文化研究』32号pp. 135-142	1983年創刊の『運動文化研究』誌に先立つその前史に遡り、同誌が創刊されるに至った経緯を教育研究運動のなかに位置づけた。同誌が担うことになった役割を踏まえ、その成果と課題を論じた。
9. 「小学校体育活動コーディネーター」が学校体育にもたらすもの	共	2011年9月	『たのしい体育・スポーツ』第30巻8号28-31頁	文科省「スポーツ立国戦略」を契機に設置が進められている「小学校体育活動コーディネーター」に期待されている役割を解説し、スポーツの文化性と権利性を実体化するという課題を提示した。
10. 運動文化の創造と学習規律の形成	単	2010年11月	『たのしい体育・スポーツ』第29巻第11号8-11頁	学習規律の形成に関する諸情勢と研究動向を解説し、学習の「きまり」と「規律」の教育学的な意味の違いに基づき、体育科の学習規律を形成する原則に関して所見を述べた。
11. 「グループ学習」研究の蓄積から受け継ぐもの	単	2010年4月	『たのしい体育・スポーツ』第29巻第4号18-21頁	グループ学習におけるオリエンテーションの指導の意義と要点を解説した。指導論を確立した1960年代にさかのぼり、自主的・主体的な学習を引き出すうえで、単元全体の学習計画づくりへの参画と合意形成、グループノートによる相互交流などの指導原則を解説した。
12. パスから始めるフットボール	共	2010年02月	創文企画・たのしい体育・スポーツ	菅原瑠子 小学校5年生のフットボールの実践記録とその分析である。従来、ランニング・プレイを指導の導入にする系統は多く紹介されているが、それをパス・プレイから始めたところ、パスサーと

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				レシーバーの関係がその後の学習活動の集団性を高め、技能習得に効果をもたらした。指導計画段階から参画し、共同でつくりまとめたものである。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 棒高跳びにおける練習環境及びトレーニング内容の実態調査	共	2019年10月12日	第32回日本トレーニング科学学会大会	他の種目と比べると歴史の浅い棒高跳びにおいては、学校施設が拠点となっておりそれ以外には練習環境が整備されていないこと、トレーニング内容では、助走、ボールの突っ込み、踏み切りなどが初心者に指導されている実態が明らかになった。今後はジュニア期から指導できる環境と空中局面の指導に検討の余地を見出した。
2. バスケットボールにおけるパスの指導に関する研究	共	2016年11月	日本教育方法学会第52回大会（九州大学）	
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. フットボールという文化の教材化	単	2019年3月30日	第116回学校体育研究同志会兵庫支部研究会におけるシンポジウム「フットボールという文化」	同年に開催が予定されている第9回ラグビーワールドカップの関心が高まる中で、ラグビーを中世フットボールの時代からその歴史をひもとくとき、近代スポーツの性格を担いながらも新たなスポーツのあり方（第3のスポーツ革命）が展開しつつあることに注目した。従来のラグビーの解説と指導を見直し、新たなラグビーの魅力と文化的価値を指導するにあたっての教材化の視点を提示した。
6. 研究費の取得状況				
1. 基盤研究（C） 新規		2011年		スポーツ文化に関する学習内容とその指導方法の開発
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2011年08月06日2019年08月05日		学校体育研究同志会全国常任委員長		
2. 2006年04月～現在		日本教育方法学会		
3. 1995年04月～現在		日本体育科教育学会		
4. 1981年04月～現在		日本体育学会		